

五戸寺鐘伝奇

——日越交流から平和にむけて

● 林 正 子

<人物紹介>

卓仙＝渡辺卓郎弁護士 五戸寺梵鐘返還運動の事務局

斎藤さん＝斎藤玄 評論家 1999年没 「梵鐘返還運動趣意書」 ジャン・シェ
ノー著 立花誠逸共訳『ベトナム民族形成史』（理論社）

後藤さん＝後藤均平 立教大学名誉教授 1998年没 「鐘銘小記」『ベトナム救
国抗争史』（新人物往来社）『日本のなかのベトナム』（そしえて）

小松女史＝小松みゆき ハノイ在住 ベトナム国营放送局（VOV：Voice of
Vietnam）勤務 「ベトナムの蝶々夫人」（『季刊民族学』108号）『越
後の Ba ちゃんベトナムへ行く』（2B 企画）

ザン嬢＝ファム・ティ・トゥ・ザン（Pham Thi Thu Giang）ハノイ国家大学
専任講師

花の都は東大寺

「事実は小説より奇なり」と申します。ここにご紹介いたしますのは、戦争の世紀といわれる20世紀をのりこえて平和の鐘となった鐘、越南五戸寺鐘の前代未聞の伝奇でございます。

日越の交流は、今をさること1200年余り、花の都は奈良の東大寺大仏開眼式、仏哲上人の林邑八楽の演奏に発します。その楽は雅楽として生き続けております。仏教が結んだ御縁でありました。

やがて16世紀には朱印船が往来いたします。中部の会安（ホイアン）には阮氏を娶った角屋七郎兵衛が松本寺を建てました。その鐘は、タイソン農民運動の時に銭と化しました。北部の東京ではクリスチャンの日本女性ウルスラが通訳として活躍しておりました。江戸幕府が海を鎖しても、漂流民の伝えた情報は小説本『南瓢記』をうみだします。もっとも売り出し後一年ちょっとで発禁をくらいましたが。さて、明治と代わりますと越南の歴史書が出版されました。

『安南史略』『大越史記全書』でございます。以上の交流、すべて漢字の力です。そうです。越南は漢字文化圏の一国でありました。

明治の元勳たちが〈坂の上の雲〉をおっていたちょうどその頃、越南はもはや漢字を使っておりません。最後の王朝・阮朝の支配は終わったのです。三色旗を左角に組み込んだ黄色の旗の下、フランス領インドシナ連邦でありました。ローマ字の登場です。例をあげれば、漢字教育を受けた最後の世代からでた潘佩珠は、Phan Boi Chau (ファン・ボイ・チャウ) となります。彼は白人に戦勝した日本を「希望の星」と見て、独立回復のための留学生を送ります。明治政府はフランスと手を結んで彼ら全員を強制退去。日越交流の縁は断たれました。

その後、昭和の戦争は、大量の日本人を兵士として越南に送りました。仏印進駐という侵略です。そして日本の敗戦と越南の独立につづくベトナム戦争。国交はやっと37年前に回復したばかり。ほんとうに、日越交流は波乱万丈でありました。

一) 鐘、誕生し迷子札をつけること——阮氏金夫人の発願

鐘の誕生の次第を「梵鐘返還運動趣意書」は次のように記しております。

五戸(グーホー)寺は、ハノイの東北二五キロの、慈山(トゥソン)府武江(ヴーザン)金堆(キムドイ)社(村)の寺である。お寺の鐘が、一八世紀後半のタイソン農民運動いらい打ちつづく不安定なある時期に、兵火に焼かれた。そこでふたたび鐘を造ったのだが、一八二五年二月、群盗に持って行かれた。村びとは、朝な夕なの鐘の音がうばわれたので、寂しくてならぬ(銘文「梵界寥聞」)。そこで翌年、みんなで錢(ぜに)を出し合って、三度び鐘を鑄ることにした。近隣の村々にも呼びかけた。発起人の中心には、村の阮仲恪(グエンチュンカク)氏(天関(ティエンクワン)府長官)の奥さんがなった。

こうして二年間、あつまった青銅錢を鑄つぶして、あらたにここにわれらが鐘ができあがった。時に明命(ミンマン)九年十二月十九日、翌一八二九年の正月(テト)を祝う二〇日前のことである。

三鑄目の鐘、この伝奇の主人公は、高さ100.0センチ、直径42.7センチで見事な龍頭をつけ、四つに区切られた表面には漢字と字喃(チュノム)がびっしりと鑄込まれています。第一面には上記の縁起(1428字)が、残る三面は醜

金した人や村の名前が埋めつくしております。「趣意書」はつづきます。

私たちがさらにおどろかすのは、第二・第三・第四面に、醸金した人の名前と村名が克明に刻まれているのである。三百銭から一銭出した人まで、男女あわせて30カ村約300名。お金が出せない農民は、たぶん労働奉仕してこれに参加した。

名前を刻みつけたのは、多くの人びとの協力で造り上げたこの鐘を、自分たちの血と汗の暮しをはげまし、生活のリズムを告げる時の鐘を、もう誰れにもうばわれまいとの、ベトナム農民の切なるねがいであった。

そうです。鐘は、30カ村約300名、うち49名は女性という農民の名前を迷子札として刻まれて誕生したのでございます。

二) 鐘、日本軍に拉致されること——仏印進駐

鐘の故郷金堆村（現キムチャン村）とはどんなところでしょう。「趣意書」を見ましようか。

五戸寺の所在は、ハノイの東北のバクニン地域、古来兵馬荒乱、いわば歴史が憂いをもつ地方です。相聞歌・米つき歌・軍鼓の歌など、ベトナムの民謡と民話の宝庫といわれているところです。

「兵荒馬乱」とは戦争と飢饉のこと。どうして戦争と飢饉がバクニンにつきまとうのか、と言えば海路・陸路のどちらも中国に通じているのです。トンキン平野の米を支配するには、必須の地。扶董天王、三歳の幼児が鉄馬に乗って殷軍を撃破した伝説が語るように、古代から中国の侵略にさらされました。19世紀後半には全土の植民地化をめざし北上するフランス軍との死闘の地でもありました。昭和の日本軍が強行した仏印進駐もここから始まるのです。

この餓死者“200万”と伝えられる仏印進駐、五戸寺に何が起こったのでしょうか。返還団を迎えたキムチャン村の村長さんは説明いたします。「1950年、抗仏戦争でフランス軍は寺を完全に破壊しました」「その時に鐘はすでにありませんでした」「1942年、日本軍が村に進駐してきて寺を材木工場に変えました。梵鐘もそのとき持ち去られました」。

日本軍がどうして鐘を日本へ拉致したのか、詳しいことはわかりません。確かなのは1977年に東京は銀座で古美術店に現れたことだけ。

三) 鐘、銀座で卓仙に遭遇すること——三人衆の成立

1977年8月のある晩、銀座の並木美術に陳列されていた鐘は、卓仙と支配人の話し声を聞きました。美術の好きな卓仙はふらっと店を覗いたのです。見慣れない形の鐘、頂に大きな龍頭をつけた細身の鐘を見て、迷子札に気づきます。四面にびっしり漢字が刻まれている鐘、年号の明命を「明日の明」「生命の命」と読んで好奇心をかきたてられます。「中国の鐘ですか?」「越南のものだそうです。18世紀のもので大変珍しいものです」。

「越南?」「ベトナムですか?」と卓仙は問い返します。その瞬間に鐘との御縁、日越交流の新しい御縁が結ばれました。

卓仙は、海軍航空部隊から復員した弁護士です。特攻の一步手前での敗戦でした。帰還した故郷に聞きなれた上田城の鐘声は失われていました。梵鐘供出令で徴発され軍需品と化した鐘の一つとなっていたのです。こうして鐘と平和は一体という特別な思いが育まれます。さらに弁護士として「アメリカ戦争犯罪調査日本委員会」の仕事で、五年前には越南での体験もありました。

鐘の売値は500万円でした。卓仙は反戦運動の仲間に声をかけました。結果、斎藤玄さん、後藤均平さんと三人で鐘を見ます。第四面でも書ききれずにはみ出した名前は、一面との溝のあいだに刻んでありました。迷子札は、「戦争はごめんだ。平和に生きたい。平和は自分たちで力をあわせてかちとろう」と読めました。三人衆が成立し、10月1日には梵鐘返還運動が始まったのです。斎藤さんは仏教界に呼びかけ、後藤さんは考証を担当しました。あつという間にベトナム戦争の報道写真家石川文洋さんが写真を、古文字学の権威で東大教授松丸道雄さんが拓本をとりました。三人衆の熱意と行動力に、鐘の値段は200万円に下がりました。「趣意書」が刷られ、毎日新聞11月11日には、「ベトナムの鐘よ 鳴れ」「流転の50年、銀座でみつかる」「村民受難の結晶」「清水寺で除夜に打つ」の見出しが躍ります。鐘の大きな写真は、松本清張氏と清水寺の大西良慶貫主の顔写真を従えていました。

四) 鐘、帰還すること——1978年

三人衆は、今度は日本人が「平和は自分たちの力をあわせてかちとろう」と鐘を帰還させることに決めたのです。「趣意書」は一紙半銭（堂塔建立の勧進の言葉）の参加をよびかけました。

一紙半銭は全国から寄せられました。総額9615981円。添えられた言葉は、「貧

者の一灯」「平和祈願」「返還祈願」「人民友好」「戦争犠牲者の鎮魂」「亡くなった肉親や友人の供養」「戦争否定」「日本軍の罪悪の償い」「日本のベトナム戦争協力の反省」「文化交流の発展」「ベトナム復興支援」「鐘の音に感銘」などなど。鐘は、平和への思いを一つに結んだのです。鐘は買い取られ自由の身となった後、寺巡りをいたしました。帰還の前に一紙半銭を寄せられた方々の一人でも多くと対面し、音色を知っていただくのです。芝の増上寺から始まって京都では清水寺といった多くの寺をへて、奈良の東大寺に着いたのは翌年1月でありました。

越南共産党機関紙ニャンゼンには、この快挙を「鐘の帰還はテトだろう」と報道。おりから中越の政治関係は悪化し国境が緊張するなかを、鐘は北京経由でハノイを目指して飛行機で帰還いたしました。

ハノイの越南仏教協会本部クアン・スー（館使）寺で返還式が行われたのは、1978年6月14日でした。返還団団長壬生照順師と越南仏教界代表が一本の撞木で鐘を打ち鳴らしました。もちろん越南式に。

みどりこき　ながふるさとのバクニンの　空ふるわせて龍の鐘なる
卓仙

五) 鐘、預けられること——ブット・タップ寺の物語

さて、クアン・スー寺での返還式は無事に終わったのでございますが、五戸寺には礎石と坊さんの墓と一本の大木が残るだけ。寺の跡は村の集会所になっておりました。返還団は村人総出の歓迎、文芸工作隊の女性たちのバクニン民謡クアンホーでもてなされます。

孤児となった鐘を引き取ったのは、ブット・タップ（筆塔）寺〔寧福寺〕です。北部の仏教中心として14世紀にさかのぼり、19世紀には阮朝の皇帝が行幸した名刹。17世紀に再興されたとき、仏師張氏が造った千手千眼観音は国宝であります。再興は、中国は福建からやってきた拙拙禪師と施主の妙円、妙慧に支えられました。妙円は神宗の皇后鄭氏玉竹、妙慧は皇女黎氏玉縁。二人は実権者鄭柑の娘と孫、寺の再建は国家事業となりました。妙□という名乗りは、鐘の迷子札にも11名を数えます。いづれも仏教の女性信者を意味します。

ブット・タップとは、拙拙禪師の墓が五重石塔で筆に似てひときわ目立つからの呼び名。バクニンから撤退するフランス軍の暴行からも、アメリカの猛爆にも残ったこと、それ自体が奇跡です。奇跡の寺は流転の鐘を預かりました。

六) 鐘、クアンホー会館に保護されること——小松女史の追跡

四年後、卓仙はブット・タップ寺を尋ねて仰天しました。鐘が消えていたのです。さらに二年後の訪問での説明は、「鐘は平和の鐘として省内を廻っていますよ」というものでした。1985年、越南大使館員から「ホーチミン市にあった」という連絡が入ったものの確認はとれませんでした。卓仙は、鐘の搜索をハノイの小松みゆき女史に託しました。小松女史は、仏印進駐がうんだ元日本兵の残留家族を追求しています。鐘の追跡にはうってつけのお方。

待つこと八年、1993年になると存在確認の知らせが届きます。小松女史はさらに追跡をつづけます。とうとう2002年、バクニン省（1996年にハバック省が二分割されて誕生）のクアンホー会館の倉庫で鐘と対面し、写真を卓仙に送ります。鐘が居る場所はバクニンの民謡クアンホーのための会館。日本で言えば、ちょうどNHKの全国のご自慢コンクールのような大会が開かれる場所です。鐘はクアンホーの歌声に護られていたのです。

七) 鐘、日本人と対面すること——卓仙の平和への渴望

「交流の鐘 展示へ」という記事、鐘がバクニン省博物館に展示されるという記事が毎日新聞に載ったのは、2009年1月24日。おかしいでしょう。小松女史から写真が届いたのは七年前でした。実は小松女史は鐘の監視をゆるめてはいませんでした。鐘が行方不明になっていたのは、国家丸抱えのバオカップから自由になったドイモイという大きな政策転換の時期。戦争で破壊された国を再建し発展させる、越南の錦繡山川をとりもどす苦闘がつづいたのです。日々変わる状況にクアンホー会館とて安全ではありません。

小松女史が鐘の安全を確認したのは、2008年8月のバクニン省博物館倉庫での対面でした。また写真が撮られ卓仙が届きます。ドイモイの下、経済発展が急進し日本企業も進出する省都バクニン市に建てられる省博物館。そこが鐘の新しい家というのです。12月、小松女史はハノイ在住の日本人に梵鐘返還運動を紹介いたします。その会は「誰がために鐘は鳴る」と名づけられました。

鐘はしっかり故郷に居る。卓仙はすっかり元気になります。さらに9月18日には信濃毎日が「平和の音色を聴きたい」と題し、鐘の拓本を手に微笑む卓仙の大写真を載せました。なんと翌日、卓仙に「ベトナム平和の鐘を鳴らす旅」の面々が越南式に打ち鳴らす鐘の音が、携帯電話で届きます。前年に憲法9条を護る「九条の会」が卓仙を招き、＜戦争と平和＞の体験を聞きました。鐘の

話にうたれた17人がツアーを組んだのです。こうして鐘は日本人と対面いたしました。とはいえこれは特別許可。鐘は省博物館に在るというものの、越南の人々に公開されてはおりません。一行はさらに望外の朗報も持ち帰りました。なんと五戸寺は再建され、尼さんが住持しているというのです。

八) 鐘、錦繡山川に在ること——ザン嬢の登場

昨年の12月、小松女史の親しい友人ファム・ティ・トゥ・ザン嬢が卓仙を訪ねてきました。大きな越南式の花束をかかえて登場したザン嬢は、きれいな日本語で挨拶されました。鐘の話を知りたい、と。卓仙の長いヒゲと温容、ゆったりした話しぶりは、仙人みたい、と。平和を追求する情熱とロマン、平和への渴望を喝破いたします。話はどんどん進みました。

ザン嬢の登場は、鬼に金棒ならぬ、仙人には鶴の出現でありました。鐘の再発見このかた、卓仙は仏教界との連帯を模索します。三人衆も一人となり、協力を惜しまず鐘を供養し送り返した仏教界の方々も彼岸に去られました。いったい誰が今、平和の鐘を次の世代に渡すのか。仏教史研究者として奈良女子大学で学んだザン嬢は、願ったり叶ったのお人。ついに東大寺と現代越南は直接したのです。

ザン嬢はバクニン、歴史の憂いをふくんだ地についてのホット・ニュースを運んできました。卓仙の一番知りたい鐘の未来をにぎる仏教界のこと、さらにブット・タップ寺の現況も明らかになります。名利といっても修復を必要とすることがわかります。寺前の大きなガジュマルの木陰で、農作業する坊さんと手伝う女性達の写真もあります。ザン嬢が訪れた時、彼女達は民謡を歌いながら寄付がわりの労働奉仕をしていたのです。まあ 迷子札の読み解きとぴったり重なるではありませんか。

驚く話はまだありました。この貧しさのなかで寺を守ろう、次の世代に残そうと立ち上がった画家ファン・カム・トゥオンさんの活躍。手弁当で通い、内側に育った木で破裂寸前の塔を救ったのも一つです。そうです。奈良の都を護った棚田嘉十郎は越南にも居りますとも。

昇龍の城は首都ハノイ

さあ 思いのほか長くなりました。動乱から生まれ、戦火をくぐり帰還して平和の鐘となった、越南は五戸寺梵鐘の前代未聞の伝奇は、これで終わりです。

三鑄の鐘は、阮朝に誕生してフランス植民地さらに日本をへて越南社会主義共和国に帰還し四世を生きました。つけられた迷子札、全身に刻まれた銘文が、流転のなかに鐘が消え去るのを許しませんでした。漢文の迷子札は日本軍に読まれ奇異なものとして、拉致の原因であったかもしれません。しかし、異境日本では古美術品としての護符ともなりました。一旦、三人衆に迷子札が読み解かれるや、バクニン農民の悲願、平和への渴望は日本人有志を共感させ、帰還を発願させたのです。帰還後はブット・タップ寺、クアンホー会館からバクニン省博物館への道を護りました。

平和の鐘は、故郷で銘文を読まれねばなりません。それは日越交流から始まった平和への訴えを世界に広め、実現することを意味します。そのため鐘にふさわしい家、いつでも誰でも会える家はどこなのか、バクニン省博物館か、五戸寺か。

今年2010年は、花の都の遷都1300年、昇龍の城の建都1000年という節目の年。今こそわたし達は、平和の鐘を次の世代にしっかり渡さねばなりません。

(銘文全文は林正子「越南五戸寺の明命九年銘鐘をめぐって(Ⅱ)ー銘文の紹介」
[[『拓殖大学論集』264] に掲載)